

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	森谷 弘乃介
論文審査担当者	主 査	外科学	北 川 雄 光	
	内科学	金 井 隆 典	先端医科学	佐 谷 秀 行
	内科学	矢 作 直 久		
学力確認担当者：			審査委員長：金井 隆典	
			試問日：平成26年10月 7日	
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Difference in the recurrence rate between right- and left-sided colon cancer: a 17-year experience at a single institution (右側結腸癌と左側結腸癌の再発率の違い：単施設17年間の成績)				
<p>本研究は、根治切除可能な結腸癌患者において、占居部位と予後について、単施設症例データから、後方視的な解析を行った。盲腸・上行結腸・横行結腸を右側結腸と、下行結腸・S状結腸を左側結腸と定義し、無再発生存率を比較したところ、全StageとStageIIおよびIIIにおいては、右側結腸が左側結腸よりも予後不良の傾向を認めたが、StageIにおいては、右側結腸の方が有意に予後良好であった。初回再発部位には有意な差は認められなかった。結腸癌の占居部位は、Stage別による層化を加味することで再発危険因子になりうる可能性があり、今後は結腸癌の占居部位別による治療戦略の可能性があることが示唆された。</p> <p>審査では、早期発見の契機となる便潜血反応や症状の有無による違いに関して問われた。今回の症例データでは、具体的な発見契機についての検討はなされていないが、Stage別に腫瘍径や年齢を比較し、有意に右側結腸で腫瘍が大きく、高齢であることを考慮すると進行しないと症状の出にくい右側結腸により進行癌が多いとは一概には言えず、腫瘍の悪性度が右側結腸の進行癌で高い可能性があるという回答された。生物学的および遺伝的背景の相違について問われた。既存の疫学的な研究結果からは、右側結腸では、リンチ症候群、マイクロサテライト不安定性、BRAF遺伝子変異の頻度が高く、左側結腸では家族性大腸腺腫症、p53遺伝子変異の頻度が高いことなどの相違点について知られているが、今回の検討ではそれらの遺伝子検索などは施行していないため、今後の課題であると回答された。しかし、本研究をすすめるにあたり、疫学的・遺伝学的な危険因子の特徴により、右側結腸の早期発見方法の検索につながる可能性があるとして、改めて有用な研究である可能性が示唆された。主たる評価項目として、全生存率ではなく、無再発生存率を選択した理由について問われた。既存のデータから右側結腸に高齢者が多く含まれており、年齢の全生存率に与える影響を考慮したことと、占居部位による初回再発部位の相違に関する検討が必要であったため、無再発生存率を選択したと回答された。また今回は根治切除可能であったStage IからIIIまでを対象としているが、Stage IVを除外した理由について問われた。論文内容にはないが、除外したStage IVについても同様に右側結腸が予後不良である傾向は認めたが、手術が施行された症例の限ったデータであるというバイアスや化学療法の年代による違いを考慮すると本研究からは除外すべきであると判断したと回答された。</p> <p>以上、本研究には単施設の結果ではあり、今後は多施設共同の前向きな臨床試験の検討が必要であるという課題が残されているものの、結腸癌の占居部位別による治療戦略の可能性を示した点で、臨床的に有意義な研究であると評価された。</p>				